種

先輩TAさんの心尽くし。全出走、8作品をお届けします。

覇者となったのは果たして誰？？

http://www.columnland.net/　　にてごらんください。

植木鉢

世界中に散らばった
数多の種を数えてごらん

幸福は幸せな時間を紡ぎ
悲しみは試練を紡ぎだす
あなたはどんな種を見つけるだろう
あなたはどんな種を育てるだろう

私は思う
あなたは一つの植木鉢
世界の種を寄せ集め
唯一の庭を包みこむ
恋も勇気も
希望も絶望も
ここにて芽吹く

そうあなたは植木鉢
些細な雑草の種さえも
彩りの中に映え渡る

そして
集めた種の行く末に
一つの物語を紡ぎだす

視野は世界から宇宙へ

宇宙への旅の実現は刻々と近づいている。最近では宇宙関連の話に日本が登場することも少なくない。もしかしたら宇宙の旅の舞台が「日本」なんてことにもなるのかもしれない。

あなたは日本でロケットを飛ばすと言われたら何処で飛ばすとおもうだろう。真っ先に種子島を思い浮かべるのではないだろうか。日本には二ヶ所のロケット発射場があるが、商用大型ロケットが打ち上げられているのが種子島だけである。なぜ日本のロケットの発射場は種子島にあるのだろうか。

ロケットを飛ばすとなったときにまず問題になるのは騒音だ。飛行機の滑走路をつくるにしたって近隣住民の迷惑にならないように周りに人のいない場所を選ぶ。大阪では海を埋め立ててつくったくらいだ。対象は人だけではなく魚でも同じである。よい漁場となっている場所でも魚が逃げてしまうため施設設置には向かない。このようなことを考えていくと島というのはとてもいい場所ということになる。

しかしこれだけの理由だったら日本中の島を探せばいくらだって場所はありそうなものである。そこで出てくるのが第二の理由である。人工衛星を軌道に乗せるには最低秒速７．９キロメートルという猛スピードが必要になる。ほとんどの国がロケットを打ち上げるときに東へ少し傾けている。これは少しでも楽に達成するために地球の自転を利用しているためである。この自転を最も効率よく使うには当然赤道付近がよいということになる。宇宙センターをつくった当時沖縄が返還されていなかった日本では種子島がそれらの条件にぴったり当てはまったのだ。ちなみにもう一つの発射場も鹿児島県であり南に位置する。

こうしてできた種子島のロケット発射場は世界で最もきれいなロケット発射場であると言われている。しかしいくら種子島にロケットの発射場があったとしても、ロケット技術そのものが進まなければ飛ばすことはできない。２００３年には筑波にＪＡＸＡという宇宙機関をつくり、日本の宇宙関係機関が終結した。日本の宇宙技術はどんどん向上していると言えるだろう。

ロケット発射場という種はある。宇宙機関という土もある。ロケットの打ち上げも成功していており芽も出ている。有人ロケットのような大きな花を咲かせるのに必要なものは、あと教育という肥料くらいだろうか。いずれにせよこの花が今後どのように成長するのかは非常に楽しみである。

♪みんなの歌♪

「おい、その日の丸弁当の梅干しの種は俺のものだ！」
「いや、俺のものだ！」
「ようし、男らしくじゃんけんで決めよう。」

『♪お寺の和尚さんがかぼちゃの種をまきました。
♪芽が…なかなかでなくて、和尚さんは言いました。「早く芽を出せかぼちゃの種、出さぬとはさみでちょんぎるぞ」切られるのがいやなかぼちゃの種はがんばって芽を出しました。芽が出て膨らんで、双葉になりました。和尚さんは言いました。「早く木になれかぼちゃの種、出さぬとはさみでちょんぎるぞ。」「…ええー…」とかぼちゃの種は思いました。「かぼちゃは木になれないんですけど…」「うるさい！切られたいのか！」切られるのがいやなかぼちゃの種は無理やり木になりました。和尚さんは言いました。「早く実になれかぼちゃの種、ならぬとはさみでちょん切るぞ。」切られると困るかぼちゃの種はがんばって実を…「いや待て！そんな小さいはさみで木が切れるもんか！やれるもんならやってみろ！」「なにを！なまいきな！」和尚さんとかぼちゃの木は喧嘩をはじめてしまいました。
♪そこに最近近所に引っ越してきて、森の妖精に会い、迷子になった妹を探すため、いまだかつてない猫の形をした生物的なバスを利用した姉妹がやってきました。「おねぇーちゃーん、すっごくおっきい木があるよ。」「じゃ、もっともっと大きくしよう。」姉妹は手を胸の前であわせ、儀式のような動きをやりだしました。その動きを微笑ましく思ったかぼちゃの木は、調子にのって伸びていきました。やがて木のてっぺんが雲の上に届きました。木登りが得意だった和尚さんはその木を登っていきました。
♪やがて雲の上に出ました。**「これは…雲の平原…」やけに静かで、空のずうっと高いところに不思議な雲が一筋、流れていた…。和尚は思わず足を踏み出した。**そのとたん、和尚さんは上空2000メートルの大空に放り出されました。雲は水蒸気が凝結したものだから、当然ですね(笑)。和尚さんは空を飛んで(**飛んでるんじゃない、落ちているだけさ。かっこつけてな…**)ぐるりとまわってじゃんけんぽん！』

「おい、なんかこの種、芽が出てるぜ…」

少年時代

12月に来た暑中見舞いのポストカードの中、サンタクロースがサーフィンに興じている。

＊　＊　＊

小学生だった私の好物はスイカバーで、しかしスイカは大嫌いだった。

水っぽくて口の中でグズグズと崩れるスイカと、ひんやり甘くて、サクサク食べられるスイカバー。

そのころの私にとって“凍ったスイカの種からスイカバーができる”ということは“スイカの種を土に埋めるとスイカができる”のと同じくらい常識的なことがらだった。

「スイカバーの種は全部食べることが出来るから、スイカバーの種からは何もできない。」

当時の私はスイカなんて大嫌いだったけれど、スイカがなければスイカバーもなくなってしまうのだと、大層に悩んでいたように思う。

ある夏の日、駄菓子屋で私がスイカバーを手にしたとき、目に入って来た文字があった。

それはスイカバーのパッケージに書かれていた“果汁10％”という表示だった。

＊　＊　＊

赤い服を着て白くて長いひげを生やして「HO—HO—HO—！」と笑う、大柄なおじいさんがサンタクロースだから、サンタクロースは赤い服しか着ないし、白いひげしか生やさないし、いつでも必ず笑っているのだろう。

赤い服と白いひげ、笑い声とおじいさん。

みんな足し合わせてようやくサンタクロースになるということなのだろう。

＊　＊　＊

スイカバーの種がチョコであると知った年の冬12月の中旬に、私は棚の奥に隠されたおもちゃを見つけた。

“一晩の間に世界中におもちゃを配る”というとんでもない存在はないんだとわかって、私はホッとした。新しい発見がうれしかった。

「いい子にしてたら、サンタさんがプレゼントをくれるからね。」と母が言った。

その言葉を聞いて、私はサンタの発見を黙っていることにした。いい子にしてることにした。

——大人は子供に夢を見せ

大人は子供に夢を見る——

B－1

ぐん、ぐん、ぐん

君はまっすぐやってくる

灰色の空のどこかから、君はまっすぐやってくる

次第に速度を増しながら、ぐんぐんぐんぐんやってくる

怖くはないの？

君を受け止めるものは、やわらかな葉や優しい花びらだけじゃない

冷たく固いアスファルトかもしれないよ

君は種

地上でぱっと花開き

瞬く間に散ってゆく

街を静かに濡らしながら

世界の孤独を許しながら

地上に無数の花が咲く

B－2

始まりはメロンだった。

食種

給食のデザートにメロン―それも皮も種もついたままのが出た日の事。少年は慎重にメロンの種を他の空いた皿に移してからメロンを食べていた。

クラスメイトたちも、少年ほど気をつけてはいなかったけれど、きちんと種を取り除いてから食べていた。ただ一人、少年の前の席のやつを除いては。

そいつはガキ大将というのに近いポジションにいるやつで、やたら食い意地が張っていて、その日も一つだけ余ったメロンを自分の物にするべく、種もろくに取らずにがっついていて、今にも種を食べてしまいそうだった。

見過ごせば良かったのかもしれない。

しかし少年にはそれを見過ごす事は出来なかった。何故なら種を食べてしまうと……。

「ばっかじゃねぇの。おまえ。種食べたって人間の体から植物が生えてくるわけねぇだろ」

そいつはそう言って少年を笑うと、これみよがし種を食べて見せた。周りもつられて笑い出す。

嘘なんかじゃない。種を食べてしまうと体から芽が出てどんどん成長して、終いには元の人の体をすっかり覆いつくしてしまうんだ。

顔に血を昇らせながらも少年がそう言うと、笑い声はまた一段と大きくなった。同じく種を食べてみせる人間まで出始める有様だった。

異変が目に見えて訪れたのはそれから数日経ってからだった。ガキ大将の服の裾からのぞく、一本のひょろりと長い蔓。

それを後ろの席から発見して少年は、自分は間違ってなかったと少し誇らしげに思うのと同時に、やつはこのまま伸びてくる蔓に飲み込まれて行くんだと考えて、そこはかとない恐怖を感じた。

次の日、服の裾からのぞく蔓の数は二本に増えていた。長さも伸びていて、細長い葉も見えている。その次の日は蔓は四本。さらに次の日は袖口や襟からのぞいているのも合わせて八本。

蔓はどんどん伸び、葉もそれに合わせて枚数を増して行った。もう袖口や襟だけではなく、足の方からも蔓が飛び出して、どこを見ても蔓や葉が目に入るようになっている。

不思議なことにその様子に気づいているのは少年だけのようだった。クラスメイトはまだしも、前に立っていて教室の様子が一番分りやすい教師さえもが植物人間への一途を辿っているガキ大将を無視している。

その内に少年は、植物が生えているのがガキ大将だけでないことに気がついた。あの時、ふざけて一緒に種を食べたやつらならまだしも、それ以外のクラスメイトからも蔓が伸び出している。

しかし悪夢はそれだけでは終らなかった。前の席のガキ大将の蔓が、後ろ―つまりは少年の席へ向かって伸び始めたのだ。少年は机を後ろにずらしたが、まだ伸びてくる。

少年にはまるでその蔓が、自分を狙って伸びているようにしか思えなかった。今ではすっかり太くなって、人の指と同じぐらいかそれ以上になっている。

それが少年を追うように追うように伸びてきて、少年をつかもうとつかもうとしていた。少年は机を後ろに下げる。また後ろに下げる。

ある日、少年は机をもう少し後ろに下げようとして、自分の頭の位置にある何かに触れた。なんだろうと振り返る。するとそこには、丁度少年の頭を包むように伸ばされた、蔓があった。

思わず息を飲んでガタンと立ち上がる。

その瞬間、全ては動き出した。

後ろの席のクラスメイトから、右隣のクラスメイトから、左隣のクラスメイトから、斜め前から、斜め後ろから、そして、正面から、蔓が少年をとらえようとうねりだす。

少年はとっさに椅子をつかんで振り回すと、包囲網から抜け出した。否、抜け出そうとした。見てみれば教室中で蔓はうねっていて、その全てが少年をつかまえようとしていたのだ。

少年は悲鳴をあげながら走って逃げた。学校中から蔓は追いかけてきたが、ただひたすらに走った。家だ。家に帰れば大丈夫だ。

家の中はしんとしていた。動くものの気配は感じられない。少年はほぅっと息をついて、食卓にもたれかかった。

息が落ち着くと、少年は食卓の上に赤くてみずみずしい果物が置いてあるのを見つけた。叫びながら駆けてきたせいでのども渇いていて、少年はそれを口の中へと放り込んだ。

この果物はなんだっただろうか。……苺だ。

苺の表面にはびっしりと、白い種のようなものが植わっていた。

あなたも世界大会に！

火種を消したら９０００点！
この国際的競技をあなたは知っているだろうか。
今大会から新しくエキシビジョン種目かつ正式種目となった競技。
「火消し競争（英名：Fire bust）」
大会開催前に世界平和の象徴として各国を運搬・輸送されるかがり火。
輸送されるかがり火を消すことが、この競技の最大の目的であります。
基本ルールについて詳しく述べたいと思います。

以下は、かがり火を甲、参加者（妨害チーム）を乙、主催者を丙とする。
乙は甲を消すことが最大にして第一の目標とする。
乙は各国で組織され、各国の獲得点数で競われる。
丙は乙に妨害されることが前提であるので、輸送ルート・輸送者を事前に提示することを義務とする。
丙は妨害行為に対してあらゆる予防・阻止をすることが可能である。
甲が消えた場合乙は１５００点獲得し、丙はあらかじめ用意した火種からまた甲を灯すこと。
乙がこの火種を消したときには９０００点獲得となる。
その時点で競技の即時続行が不可能である場合、その国の乙の優勝である。
その場合丙は開始地点で再度甲および火種を取得し、次国から競技を再開させなければならない。
基本的に各国の乙の優劣は獲得点数で決定する。
乙の獲得点数は分類して以下の三点に分けられる。
技術点（消火等）・美術点（旗、衣装等）・構成点（ルート変更させた等）。

この競技は大会初の一般市民が参加できる競技であり、大会の基本理念である「参加することに意義がある」を具現化した競技とも言えるのです！
そして今月下旬、とうとう日本にやってくる！
あなたも是非参加してみませんか？

B－4

徒然

なぜ勉強するのだろう。
あなたはこの疑問にぶち当たったことはあるだろうか。
私は何度もある。
長期休暇やゴールデンウィークのたびに積み上げられる大量の宿題。
これだけで何度憂鬱な気持ちになったことであろうか。
一教科における量、それは至極簡単な量であり、それを期間内に終わらせることは当然な量である。
しかしその「当然」が積み重なり、五教科、六教科ともなると「当然」とはいえない量になってくる。
教師側で言い換えれば、一人のテストの丸付けをすることは至極簡単であるが、それが百人、二百人分となれば無理になることと同じである。
なぜ教師はこんなに困難な量を自分たちに求めるのであろうか。
果たして謎であり、その度に気持ちは沈んでいった。

そしてその疑問の真っ只中から抜け出した今、なんだか光明が見えた気がする。
例えば義務教育を終えて、高校で習う数学。
果たして日常で使うことは一体あるのだろうか。
単純に考えれば、はっきり言ってしまえば、生活に即したものでは無い。
微分してグラフの形が分かってどうなる。
コンピュータにさせればいいじゃないか。
そして受験になると、解くための発想が湧かなければ、問題との相性が合わなければ、意味が無い。
発想レベルの問題のために一体何をどうすればいいのだろうか。
全くもって五里霧中の世界である。
しかし大学に入り、それぞれの学科で頑張るみんなを見てふと思った。
高校まで同じことをしてきた筈なのに大学になって何故急に異なる専門分野に進むことが出来るのであろうか。
果たしてそれは高校での勉強は、多くの専門分野に精通する部分、また数学という専門の触りの学習をやっているのだと。
だから「算数」でなく「数学」をやったのだろうと。
言ってしまえば単純なことで、すぐ考え付くこと・思いつくことだ。
なのに高校生時代はただただ目の前にある勉強に対して嫌気を感じるだけであった。
いづれにせよ高校までの勉強とはまだ土壌整備に他ならない。
種すら植えていないのだ。
大学に入って初めて種を蒔き、育てていくのだ。

それにしても随分と長い土壌整備であったなと思う。
芽吹くことも、花をつけることも、実をなすことも未だに不定。
しかし逆に言えば、これからどんな花・実をつけさせることの無限の可能性をも示しているとも言えるのだ。

君ならどんな種を蒔きますか。